

日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

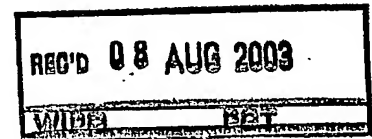
23.06.03

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office.

出 願 年 月 日
Date of Application: 2002年 6月24日

出 願 番 号
Application Number: 特願2002-183010
[ST. 10/C]: [JP2002-183010]



出 願 人
Applicant(s): スガツネ工業株式会社

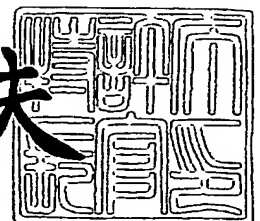
BEST AVAILABLE COPY

PRIORITY
DOCUMENT
SUBMITTED OR TRANSMITTED IN
COMPLIANCE WITH RULE 17.1(a) OR (b)

2003年 7月25日

特許庁長官
Commissioner,
Japan Patent Office

今井康夫



【書類名】 特許願

【整理番号】 P02058

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 A47G 25/12

【発明者】

 【住所又は居所】 東京都千代田区東神田 1 丁目 8 番 1 1 号 スガツネ工業
 株式会社内

 【氏名】 真部 幸美

【特許出願人】

 【識別番号】 000107572

 【氏名又は名称】 スガツネ工業株式会社

【代理人】

 【識別番号】 100085556

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 渡辺 昇

【選任した代理人】

 【識別番号】 100115211

 【弁理士】

 【氏名又は名称】 原田 三十義

【手数料の表示】

 【予納台帳番号】 009586

 【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

 【物件名】 明細書 1

 【物件名】 図面 1

 【物件名】 要約書 1

 【包括委任状番号】 0106503

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書
【発明の名称】 傘保管装置
【特許請求の範囲】

【請求項 1】 支柱に互いにほぼ平行に支持された複数の支持部材と、各支持部材にその長手方向に沿って設けられ、傘の把手又はその近傍の中軸を保持する複数の保持錠とを備えた傘保管装置において、

互いに隣接する支持部材の間にそれらの一端部側から傘を上下逆に立てた状態で挿入することができるよう、互いに隣接する支持部材の長手方向の一端部間に存する端面部を開放したことを特徴とする傘保管装置。

【請求項 2】 上記端面部のうち、少なくとも上記支持部材の高さのほぼ半分より上側の部分を開放したことを特徴とする請求項 1 に記載の傘保管装置。

【請求項 3】 上記複数の支持部材を、その長手方向を前後方向に向けて配置し、左右方向に隣接する二つの支持部材の前端部間に存する前端面部を開放したことを特徴とする請求項 1 又は 2 に記載の傘保管装置。

【請求項 4】 上記複数の支持部材を後方へ向かって上り勾配をなすように傾斜させたことを特徴とする請求項 3 に記載の傘保管装置。

【請求項 5】 上記複数の支持部材を、その長手方向を左右方向に向けて配置し、前後方向に隣接する二つの支持部材の左右の両端部間に存する両端面部の少なくとも一方を開放したことを特徴とする請求項 1 又は 2 に記載の傘保管装置。

【請求項 6】 上記複数の支持部材のうち、前側の支持部材を低く、後側の支持部材を高く配置したことを特徴とする請求項 5 に記載の傘保管装置。

【請求項 7】 上記保持錠が、上記傘の把手又はその近傍の中軸が上下に挿通される保持凹部が形成された錠本体と、この錠本体に上記保持凹部を閉じた閉位置と上記保持凹部を開いた開位置との間を変位可能に設けられた開閉体とを有し、上記保持凹部が上記支持部材の長手方向とほぼ直交する水平方向に向かって開放され、上記開閉体が、上記支持部材の長手方向における上記保持凹部の一側部近傍に配置され、開時には上記保持凹部の開放方向に向かって上記錠本体から突出させられていることを特徴とする請求項 1～6 のいずれかに記載の傘保管装

置。

【請求項 8】 上記保持錠が、上記傘の把手又はその近傍の中軸が上下に挿通される保持凹部が形成された錠本体と、この錠本体に上記保持凹部を閉じた閉位置と上記保持凹部を開いた開位置との間を変位可能に設けられた開閉体とを有し、上記保持凹部が上記支持部材の長手方向に向かって開放され、上記開閉体が上記錠本体に出没可能に設けられ、開時には上記錠本体内に収容され、閉時には上記錠本体から突出し上記保持凹部の開放部を閉じることを特徴とする請求項 1～6 のいずれかに記載の傘保管装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

この発明は、互いに平行に配置された支持部材に複数の保持錠を設け、この保持錠に傘の把手又はその近傍の中棒を保持させるようにした傘保管装置に関する。

【0002】

【従来の技術】

一般に、傘保管装置は、次のように構成されている。すなわち、深さの浅い長方形をなす水受けの四隅部には、支柱がそれぞれ立設されており、各支柱の上端部には、水平に配置された 4 本の保持部材の各端部が支持されている。この 4 本の保持部材によって長方形の枠体が構成されている。この枠体を構成する 4 本の保持部材のうち、前後方向又は左右方向に対向する一対の保持部材間には、複数の支持部材が水平に掛け渡されている。各支持部材には、複数の保持錠が支持部材の長手方向に並べて配置されている。

【0003】

このように構成された傘保管装置に傘を保管する場合には、まず、傘の上下を逆にした状態で傘全体を保持部材の上方へ移動させる。次に、傘を保持させようとする保持錠の近傍まで水平方向へ移動させる。その後、傘を下方へ移動させ、傘の把手又はその近傍の中棒を保持錠の凹部と対向させる。そして、把手又は中棒を凹部に挿入する。その後、保持錠の開閉体を開位置に変位させる。これによ

り、傘が保持錠に取り外し不能に保持される。開閉体を閉位置に変位させると、保持錠の鍵が取り外し可能になる。鍵を保持錠から取り外すことにより、傘の盗難が防止される。

【0004】

【発明が解決しようとする課題】

上記従来の傘保管装置においては、4本の保持部材が枠体を構成しているので、傘の把手又はその近傍の中棒を保持錠の凹部に挿入する場合には、傘を各保持部材によって構成される枠体より上方へ移動させた後、枠体内に移動させる必要がある。ところが、傘を保持部材より上方へ移動させると、傘の上端部たる石突き先端（上下を逆にした傘の下端）から雫が落ち、先に保管された傘の把手を濡らしてしまうという問題があった。また、身長の高い子供にとっては、傘全体を保持部材より上方へ移動させることが困難であり、傘保管装置を容易に利用することができないという問題があった。

【0005】

【課題を解決するための手段】

この発明は、上記の問題を解決するためになされたもので、支柱に互いにほぼ平行に支持された複数の支持部材と、各支持部材にその長手方向に沿って設けられ、傘の把手又はその近傍の中軸を保持する複数の保持錠とを備えた傘保管装置において、互いに隣接する支持部材の間にそれらの一端部側から傘を上下逆に立てた状態で挿入することができるよう、互いに隣接する支持部材の長手方向の一端部間に存する端面部を開放したことを特徴としている。

この場合、上記端面部のうち、少なくとも上記支持部材の高さのほぼ半分より上側の部分を開放することが望ましい。

上記複数の支持部材を、その長手方向を前後方向に向けて配置し、左右方向に隣接する二つの支持部材の前端部間に存する前端面部を開放してもよい。その場合には、上記複数の支持部材を後方へ向かって上り勾配をなすように傾斜させることが望ましい。

上記複数の支持部材を、その長手方向を左右方向に向けて配置し、前後方向に隣接する二つの支持部材の左右の両端部間に存する両端面部の少なくとも一方を

開放してもよい。その場合には、上記複数の支持部材のうち、前側の支持部材を低く、後側の支持部材を高く配置するのが望ましい。

上記保持錠が、上記傘の把手又はその近傍の中軸が上下に挿通される保持凹部が形成された錠本体と、この錠本体に上記保持凹部を閉じた閉位置と上記保持凹部を開いた開位置との間を変位可能に設けられた開閉体とを有し、上記保持凹部が上記支持部材の長手方向とほぼ直交する水平方向に向かって開放され、上記開閉体が、上記支持部材の長手方向における上記保持凹部の一側部近傍に配置され、開時には上記保持凹部の開放方向に向かって上記錠本体から突出させられていることが望ましい。

上記保持錠が、上記傘の把手又はその近傍の中軸が上下に挿通される保持凹部が形成された錠本体と、この錠本体に上記保持凹部を閉じた閉位置と上記保持凹部を開いた開位置との間を変位可能に設けられた開閉体とを有し、上記保持凹部が上記支持部材の長手方向に向かって開放され、上記開閉体が上記錠本体に出没可能に設けられ、開時には上記錠本体内に収容され、閉時には上記錠本体から突出し上記保持凹部の開放部を閉じるように構成することが望ましい。

【0006】

【発明の実施の形態】

以下、この発明の実施の形態について図1～図14を参照して説明する。

図1～図5は、この発明の第1実施の形態を示す。この実施の形態の傘保管装置Aは、水受け部1を有している。水受け部1は、この傘保持装置Aによって保管された傘（図示せず）の上端部（保管された状態では下端部）に設けられた石突きから滴り落ちる雫を受けるものであり、深さの浅い容器状をなしている。水受け部1は、左右に長い長方形状をなしているが、前後に長い長方形状、正方形状その他の形状にしてもよい。水受け部1の下面の4隅部には、ストッパ付きのキャストKが設けられている。したがって、傘保持装置1は、容易に移動させることができるとともに、所望の位置に停止させることができる。

【0007】

水受け部1の上面の奥側における左右の両端部には、支柱2がそれぞれ立設されている。支柱2、2の中間部間には、補強用の連結棒材3が掛け渡されており

、上端部間には、長手方向を左右方向に向けて水平に配置された保持部材 4 が掛け渡されている。保持部材 4 は、支柱 2， 2 と一体に形成されているが、別体に形成して支柱 2， 2 の上端部に固定してもよい。保持部材 4 の前面には、複数の支持部材 5 の各基端部が設けられている。支持部材 5 は、この実施の形態では 4 つ設けられているが、4 つ以外の複数個設けてもよい。また、支持部材 5 は、保持部材 4 と一体に設けられているが、別体に形成して保持部材 4 の前面に固定してもよい。4 つの支持部材 5 のうちの 2 つは、保持部材 4 の両端部に配置されている。残りの二つの支持部材 5 は、保持部材 4 の長さを 3 等分する位置に配置されている。

【0008】

各支持部材 5 は、保持部材 4 の前面から前方へ向かって水平に延びており、その先端面（前面）は水受け部 1 の前面と前後方向においてほぼ同一位置に位置している。各支持部材 5 の先端部は、従来の傘保管装置と異なり保持部材 4 によって支持されることがなく、自由端となっている。したがって、水受け 1 の前側の端部と、左右に隣接する二つの支持部材 5， 5 の各先端部とによって区画される前端面部（図 1 において想像線で示す部分；端面部）6 は、前方に向かって開放されている。なお、水受け部 1 の上面から支持部材 5 までの高さは、市販されている通常の傘の把手から石突きの先端までの長さとはほぼ同等か、それより若干高く設定されている。したがって、通常の長さを有する傘であれば、上下を逆に向きにして前端面部 6 から左右に隣接する二つの支持部材 5， 5 間に挿入することができる。

【0009】

各支持部材 5 の先端部を支持せずに自由端としておくと、支持部材 5 の強度が低下する。そこで、左右方向の両端部に配置された各支持部材 5 の先端面と支柱 2 の中間部との各間、及び左右方向の中間部に配置された各支持部材 5 の先端面と連結棒材 3 との各間には、補強部材 7 がそれぞれ設けられている。これにより、各支持部材 5 が補強されている。補強部材 7 は、それが設けられた支持部材 5 と左右方向において同一位置に配置されている。したがって、前端面部 6 から傘を支持部材 5， 5 間に挿入するときに補強部材 7 が邪魔になることはない。

【0010】

各支持部材 5 の左右の両側部には、複数の保持錠 8 が支持部材 5 の長手方向に並んで設けられている。保持錠 8 は、図 5 に示すように、本体部 9 を有している。この本体部 9 の背面部には、当該背面部を傘保管装置 1 の前後方向に横断する取り付け凹部 9 a が形成されている。この取り付け凹部 9 a に支持部材 5 が嵌め込まれることによって保持錠 8 が支持部材 5 に支持され、さらにビス（図示せず）等によって支持部材 5 に固定されている。保持錠 8 については、これに代えて他の周知の保持錠を用いてもよく、ビス以外の他の手段で支持部材 5 に取り付けてもよい。

【0011】

本体部 9 の前面部には、当該前面部を上下方向に縦断する保持凹部 9 b が形成されている。この保持凹部 9 b は、例えば「J」字状をなす把手を有する傘であれば、把手の直線状をなす上端部（保管状態では下端部）が挿脱可能に挿入され、あるいは折り畳み傘のように把手が太い場合には、把手から上方（保管状態では下方）へ延びる中軸の把手近傍部分が挿脱可能に挿入される。本体部 9 の前面部には、開閉体 10 が設けられている。開閉体 10 は、本体部 9 の前面部の保持凹部 9 b に対して前後に隣接する箇所に配置されている。すなわち、支持部材 5 の右側部に設けられた保持錠 8 では、開閉体 10 が保持凹部 9 b より後方に設けられ、支持部材 5 の左側に設けられた保持錠 8 では、開閉体 10 が保持凹部 9 b より前方に設けられている。これは、支持部材 5 の左右に配置された保持錠 8, 8 として同一の保持錠を用いたことによるものである。

【0012】

開閉体 10 は、例えば実開平 4-20585 号公報に記載された保持錠の開閉体と同様に、図 5 において実線で示す開位置と想像線で示す閉位置との間を出没回動可能に設けられている。開位置に位置した開閉体 10 は、把手又は中軸が保持凹部 9 b の底面にはほぼ突き当たるまで挿入され、保持凹部 9 b の底面から突出した操作突起（図示せず）が把手又は中軸によって所定の位置まで底面側に押し込まれると、本体部 9 の内部に設けられた付勢手段に抗して閉位置まで閉回動変位させられる。そして、開閉体 10 は、閉位置まで回動変位すると、本体部 9 内

に設けられたラッチ機構（図示せず）によって閉位置に係止される。この状態では、傘の把手又は中軸が保持凹部 9 b から取り外し不能になる。しかも、ラッチ機構を解除する鍵 1 1 が図 5 に示す状態から一方向（例えば、時計方向）へほぼ 9 0° 回動され、本体部 9 の上面に設けられた鍵穴（図示せず）から抜き取り可能になる。鍵 1 1 を鍵穴から抜き出すことにより、傘の盗難が防止される。その一方、鍵穴に鍵 1 1 を差し込んで他方向へほぼ 9 0° 回動させると、ラッチ機構による開閉体 1 0 の係止状態が解除され、開閉体 1 0 が付勢手段によって開位置まで開回動変位させられる。この状態では、傘が保持凹部 9 b から抜き出し可能になる一方、鍵 1 1 が鍵穴から抜き出し不能になる。

【 0 0 1 3 】

上記構成の傘保管装置 A に傘を保管する場合には、まず、傘を支持部材 5, 5 間に挿入する。このとき、支持部材 5, 5 間の前端面部 6 が開放されているから、傘を上下逆に立て、かつ少なくとも傘の把手より下側の部分を保持部材 4、支持部材 5 及び保持錠 8 より下側に位置させた状態で支持部材 5, 5 間に挿入することができる。したがって、傘全体を保持部材 4、支持部材 5 及び保持錠 8 より上方へ移動させる必要がない。よって、傘の石突きの先端部から雫が滴り落ちてもし先に保管されている傘の把手等を濡らすという不具合を未然に防止することができる。しかも、傘全体を保持部材 4、支持部材 5 及び保持錠 8 の上方へ移動させる必要がないので、身長の高い子供でも傘を支持部材 5, 5 間に容易に挿入することができる。

【 0 0 1 4 】

傘を支持部材 5, 5 間に挿入したら、開状態になっている保持錠 8 の保持凹部 9 b にその前面開放部から傘の把手又は中軸を挿入する。この場合、開閉体 1 0 が保持凹部 9 b の後方に配置されているならば、傘の把手又は中軸を開閉体 1 0 にほぼ突き当たるまで傘を支持部材 5, 5 間に挿入することにより、把手又は中軸を保持凹部 9 b の開放部と対向させることができる。それによって、把手又は中軸を保持凹部 9 b に容易に挿入することができる。それ故、開閉体 1 0 については、傘の挿入方向（開放された前面部 6 から奥側へ向かう方向）において保持凹部 9 b より奥側に配置することが望ましい。ただし、これは、開閉体 1 0 がそ

の開時に保持凹部 9 b が形成された本体部 9 の前面から前方へ、つまり傘の挿入方向と交差する方向へ突出していることを前提とする。なお、開閉体 10 が保持凹部 9 b の前方に配置されている保持錠 8 に傘を保持させる場合には、把手又は中軸が開閉体 10 を通過するまで傘を挿入した後、傘を前端面部 6 側に戻し、開閉体 10 にほぼ突き当てる。そして、保持凹部 9 b に把手又は中軸を挿入する。

【0015】

把手又は中軸を保持凹部 9 b にその底面側へ向かって所定の深さまで挿入すると、操作突起が把手又は中軸によってを保持凹部 9 b の底面側へ押圧移動させられる。すると、開閉体 10 が閉位置まで変位する。この結果、把手又は中軸が保持凹部 9 b に脱出不能に保持される。その後、鍵 11 を鍵穴から抜き出して傘保管装置 A に対する傘の保管作業を終了する。

【0016】

傘保管装置 A に保管された傘を取り出す際には、鍵穴に鍵 11 を差し込んで閉位置から開位置まで回動させる。すると、開閉体 10 が開位置まで回動変位して保持凹部 9 b を開く。この結果、把手又は中軸が保持凹部 9 b の前面開放部から脱出可能になる。把手又は中軸を保持凹部 9 b の前面開放部から抜き出したら、傘を前方へ移動させ、支持部材 5, 5 の間から前端面部 6 を通して傘保管装置 A の外側へ移動させる。これにより、傘を傘保管装置 A から取り出すことができる。なお、鍵 11 を開位置に回動させると、操作突起は傘を保管する前の元の位置に復帰する。

【0017】

次に、この発明の他の実施の形態について説明する。なお、以下の実施の形態に関しては、上記の実施の形態と異なる構成部分についてのみ説明することとし、同様な構成部分には同一符号を付してその説明を省略する。

【0018】

図 6 ～図 9 は、この発明の第 2 実施の形態を示す。この実施の形態の傘保管装置 B においては、上記実施の形態の補強部材 7 に代えて、支柱 12 が設けられている。したがって、支柱 12 は、支持部材 5 と同数の 4 本用いられている。各支柱 12 は、水受け部 1 の上面の前端部に立設されており、各支持部材 5 と左右方

向において同一位置に配置されている。各支柱12の上端部は、支持部材5の前端部に連結されている。したがって、この傘保管装置Bにおいては、前端面部6が水受け部1の前端部、左右に隣接する支持部材5、5の各前端部、及び当該支持部材5、5の前端部に連結された二つの支柱12、12によって区画されている。なお、各支柱12は、この傘保管装置Bでは支持部材5と一体に設けられているが、支持部材5と別体に形成し、接着剤又はボルト等によって支持部材5に固定してもよい。

【0019】

水受け部1の背面、支柱2、2の背面及び保持部材4の後端面には、多数の小孔を有するパンチボード13が固定されている。このパンチボード13により、水受け部1、支柱2、2及び保持部材4によって区画される後面部が閉じられている。水受け部1の左右方向の両端部に配置された支柱2、2と支柱12、12との各間、及び水受け部1の左右方向の中間部に配置された支柱12、12とパンチボード13との各間には、支持部材5と平行に延びる補強棒材14がそれぞれ設けられている。パンチボード13は、前述した第1実施の形態の傘保管装置1に用いてもよい。

【0020】

図10～図13は、この発明の第3実施の形態を示す。この実施の形態の傘保管装置Cにおいては、水受け部1の上面の左右の両側部に、支柱2が3本宛て立設されている。3本の支柱2は、水受け部1の両側部の前後方向における両端部と中央部とにそれぞれ配置されている。左右方向において対向する2本の支柱2、2の上端部間には、支持部材5が水平に掛け渡されている。したがって、この傘保持装置Cにおいては、支持部材5が3つ用いられており、各支持部材5は、その長手方向を左右方向に向け、かつ前後方向に互いに離れて配置されている。

【0021】

水受け部1の上面の左右方向における一側部（図10において右側部）、同一側部に配置された前後に隣接する二つの支柱2、2、及びこの支柱2、2にそれぞれ支持された支持部材5、5の一端部（右端部）によって右側端面部（端面部）15が区画され、水受け部1の上面の他側部、同他側部に配置された前後に隣

接する二つの支柱 2, 2、及びこの支柱 2, 2 にそれぞれ支持された支持部材 5, 5 の他端部（左端部）によって左側端面部（端面部） 16 が区画されている。各側端面部 15, 16 は、左右方向に向かって開放されている。したがって、この傘保管装置 C によれば、傘を支持部材 5, 5 間に左右いずれの側からも挿入することができる。勿論、側端面部 15, 16 の一方だけを開放し、他方を閉じてもよい。

【0022】

左右に隣接する支柱 2, 2 の中間部間には、連結部材 17 が設けられており、それによって支柱 2 が補強されている。支柱 2 をより補強するために、図 10 において想像線で示すように、左右に隣接する支柱 2, 2 の間に連結部材 18 を設けてもよい。ただし、連結部材 18 を設けると、傘を支持部材 5, 5 間に挿入するときに、傘を連結部材 18 より上まで移動させる必要がある。そこで、連結部材 18 については、支柱 2 の補強をなし得る範囲においてできる限り低く配置するのが望ましく、通常は支柱 2 の高さのほぼ中央か、それより若干低い位置に配置される。

【0023】

図 14 は、この発明に係る傘保管装置に用いるのに好適な保持錠の他の例を示すものである。この保持錠 20 においては、本体部 21 の背面部に当該背面部を支持部材 5 の長手方向に横断する取り付け凹部 21a が形成されており、この取り付け凹部 21a に支持部材 5 が挿入された後、本体部 21 がビス等によって支持部材 5 に取り付けられるようになっている。支持部材 5 の前面は、支持部材 5 の長手方向とほぼ平行になっており、支持部材 5 の長手方向における本体部 21 の前面の一端部には、保持体 22 が設けられている。この保持体 22 は、本体部 21 の前面から前方へ突出する垂直部 22a と、この垂直部 22a の先端部から本体部 21 の前面に沿ってその他端側へ水平に延びる水平部 22b とを有している。保持体 22 の垂直部 22a 及び水平部 22b と本体部 21 の前面とにより、上下の両端部が開放されるとともに、本体 21 の他端側を向く一側部が開放された保持凹部 23 が形成されている。この保持凹部 23 には、傘の把手又は中軸が保持凹部 23 を上下に貫通した状態で挿入される。

【0024】

本体部 21 の前面の他端側には、窓孔 21b が形成されている。この窓孔 21b には、開閉体 24 が配置されている。この開閉体 24 は、本体部 21 に出沒変位可能に設けられており、その全体が窓孔 21b 内に入り込んだ開位置と、一端部が窓孔 21b から突出して水平部 22b の先端部に極く接近して対向した閉位置との間を回動変位可能になっている。開閉体 24 が閉位置に変位すると、把手又は中軸が保持凹部 23 から脱出不能になる。

【0025】

上記保持錠 20 を傘保管装置に用いる場合には、保持錠 20 を支持部材 5 に取り付ける。この場合、保持錠 20 は、その保持凹部 23 の一側開放部が傘保管装置の開放された端面部側を向くように取り付ける。このようにして保持錠 20 が取り付けられた傘保管装置においては、傘を開放された端面部から支持部材 5, 5 間に挿入し、保持錠 20 の本体部 21 の前面に沿って単に移動させることにより、傘の把手又は中軸を保持凹部 23 に挿入することができる。把手又は中軸を保持凹部 23 に挿入した後、鍵 25 を図 14 に示す開位置から閉位置までほぼ 90° 回動させると、開閉体 24 が保持凹部 23 の開放部を閉じる。これによって、傘が傘保管装置に保管される。しかも、鍵 25 を閉位置に回動させると、鍵 25 を鍵穴（図示せず）から抜き取り可能になる。傘保管装置に保管された傘を取り外す場合には、鍵穴に鍵 25 を挿入して開位置まで回動させる。すると、開閉体 24 が開位置に変位移動して保持凹部 23 の開放部を開く。そこで、傘を傘保管装置に挿入したときと逆方向へ移動させることにより、保持凹部 23 から抜き出すとともに、開放された端面部を通して支持部材 5, 5 間から脱出させる。

【0026】

なお、この発明は、上記の実施の形態に限定されるものでなく、適宜変更可能である。

例えば、傘保管装置 A, B においては、支持部材 5 を水平に、つまり支持部材 5 の前後の端部の高さを同一高さにしているが、支持部材 5 の高さを手前側で低くし、奥側へ向かうにしたがって高くなるように配置してもよい。このように配置すると、奥側に保管された傘が見易くなり、自己の傘を容易に認めることがで

きる。これは、傘保管装置 C においても同様であり、傘保管装置 C の場合には、各支持部材 5 の高さを、手前側の奥側に向かって段階的に高くすればよい。

また、上記の実施の形態においては、支持部材 5 の長手方向の端部によって区画される端面部（前端面部 6、側端面部 15、16）の水受け部 1 より上側又は支柱 2 の中央部より上側を開放しているが、この発明の効果を得るには、端面部のうちの、保持錠 8 の本体部 9 の下面より上側を開放すれば足りる。ただし、傘の上方への移動距離を小さくすることができるよう、少なくとも支柱 2 の中央部より上側の部分を開放するのが望ましい。

【0027】

【発明の効果】

以上説明したように、この発明によれば、傘を傘保管装置に保管させる際に、石突きの先端から滴り落ちる雫によって先に保管された傘の把手が濡てしまうのを防止することができ、しかも身長の高い子供にとっても傘保管装置を容易に利用することができるという効果が得られる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

この発明の第 1 実施の形態を示す斜視図である。

【図 2】

同実施の形態の正面図である。

【図 3】

同実施の形態の平面図である。

【図 4】

同実施の形態の側面図である。

【図 5】

同実施の形態において用いられている保持錠を示す斜視図である。

【図 6】

この発明の第 2 実施の形態を示す斜視図である。

【図 7】

同実施の形態の正面図である。

【図 8】

同実施の形態の平面図である。

【図 9】

同実施の形態の側面図である。

【図 10】

この発明の第 3 実施の形態を示す斜視図である。

【図 11】

同実施の形態の正面図である。

【図 12】

同実施の形態の平面図である。

【図 13】

同実施の形態の側面図である。

【図 14】

この発明に係る傘保管装置において用いるのに好適な保持錠の他の例を示す斜視図である。

【符号の説明】

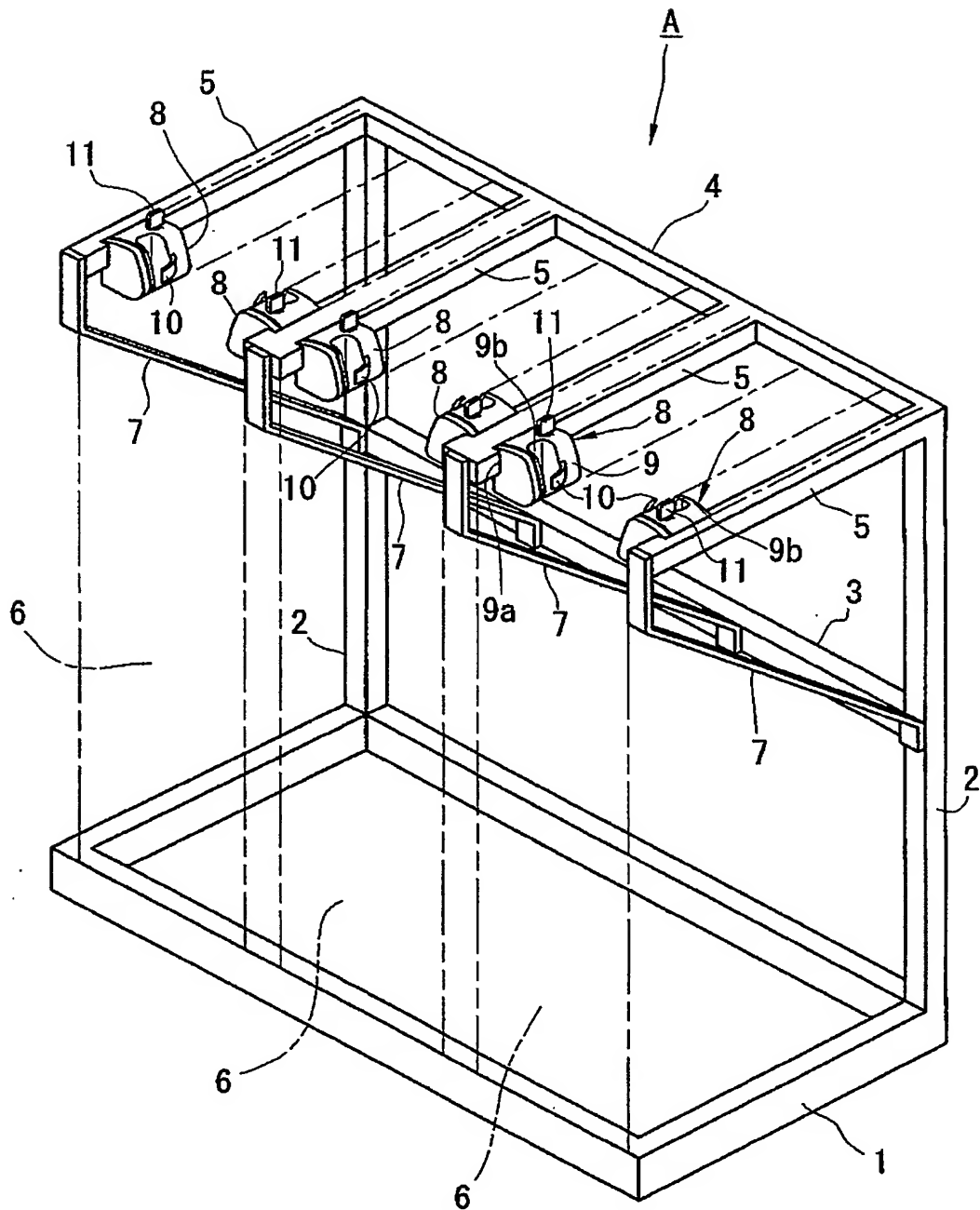
- A 傘保管装置
- B 傘保管装置
- C 傘保管装置
- 2 支柱
- 5 支持部材
- 6 前端面部（端面部）
- 8 保持錠
- 9 錠本体
- 9 b 保持凹部
- 10 開閉体
- 15 右側端面部（端面部）
- 16 左側端面部（端面部）
- 20 保持錠

- 2 1 錠本体
- 2 3 保持凹部
- 2 4 開閉体

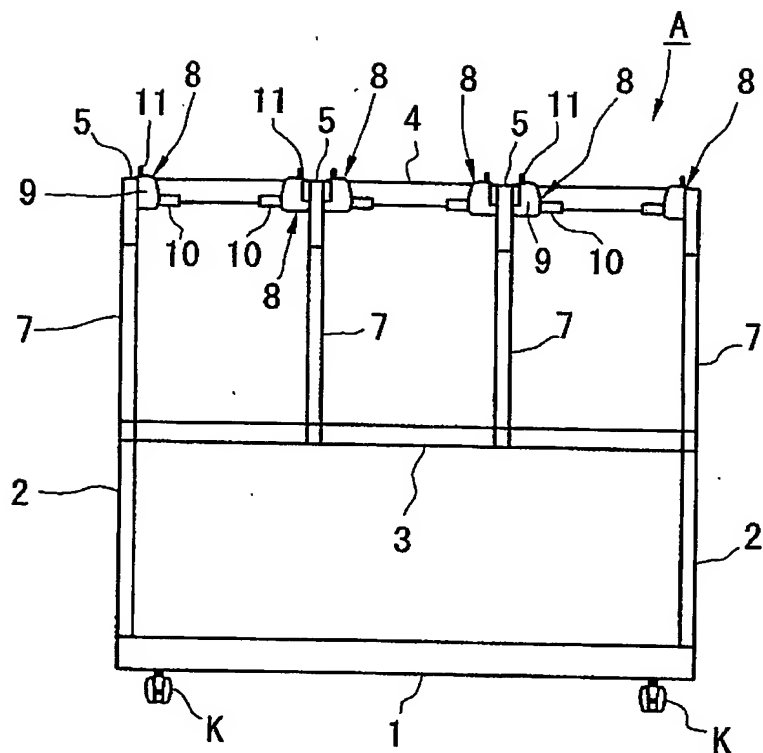
【書類名】

図面

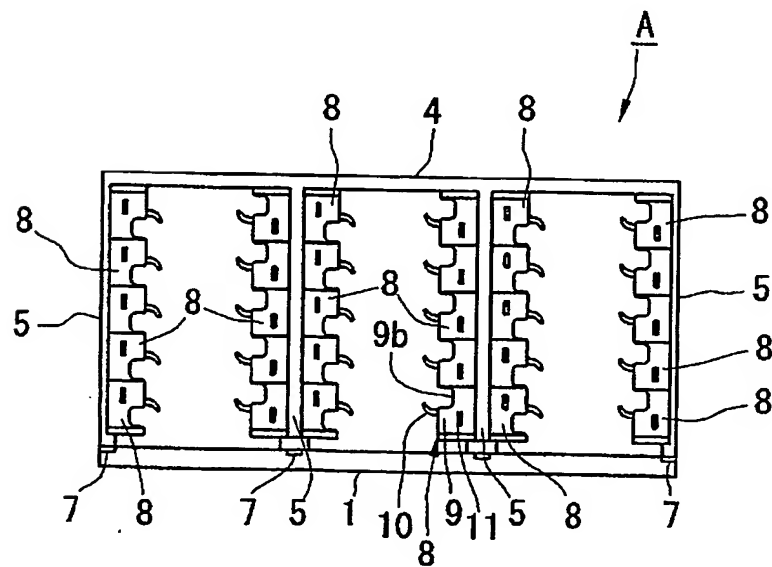
【図 1】



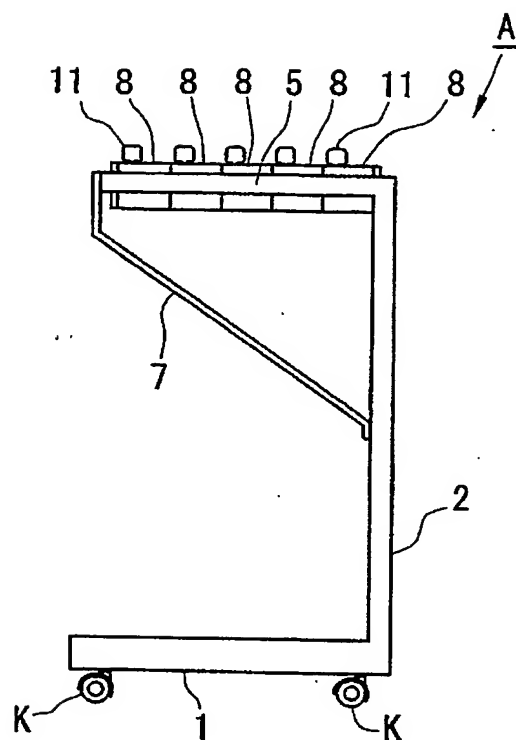
【図 2】



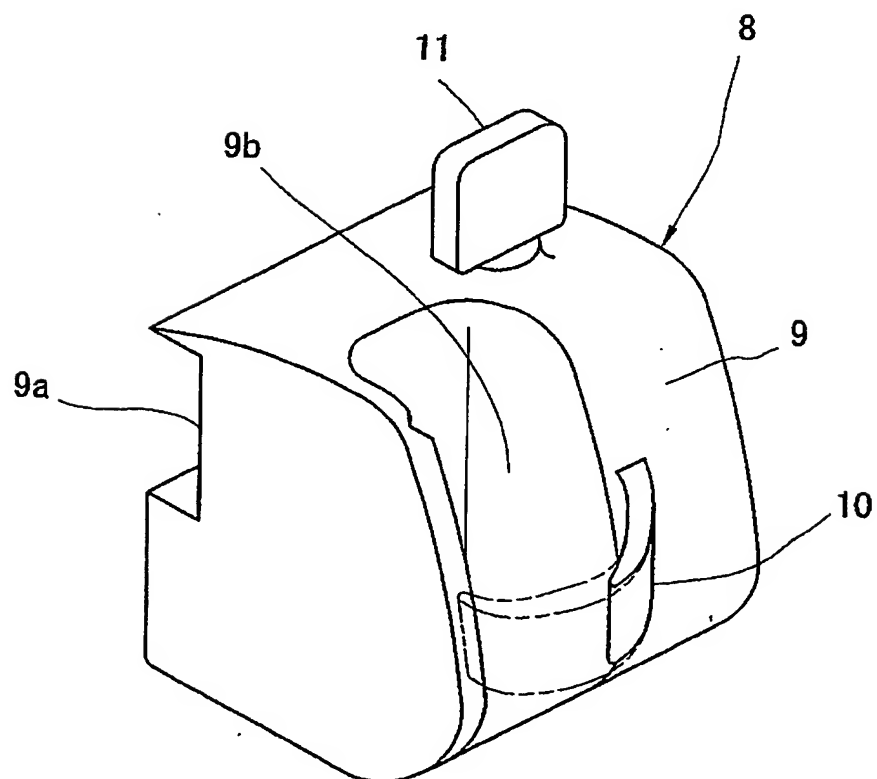
【図 3】



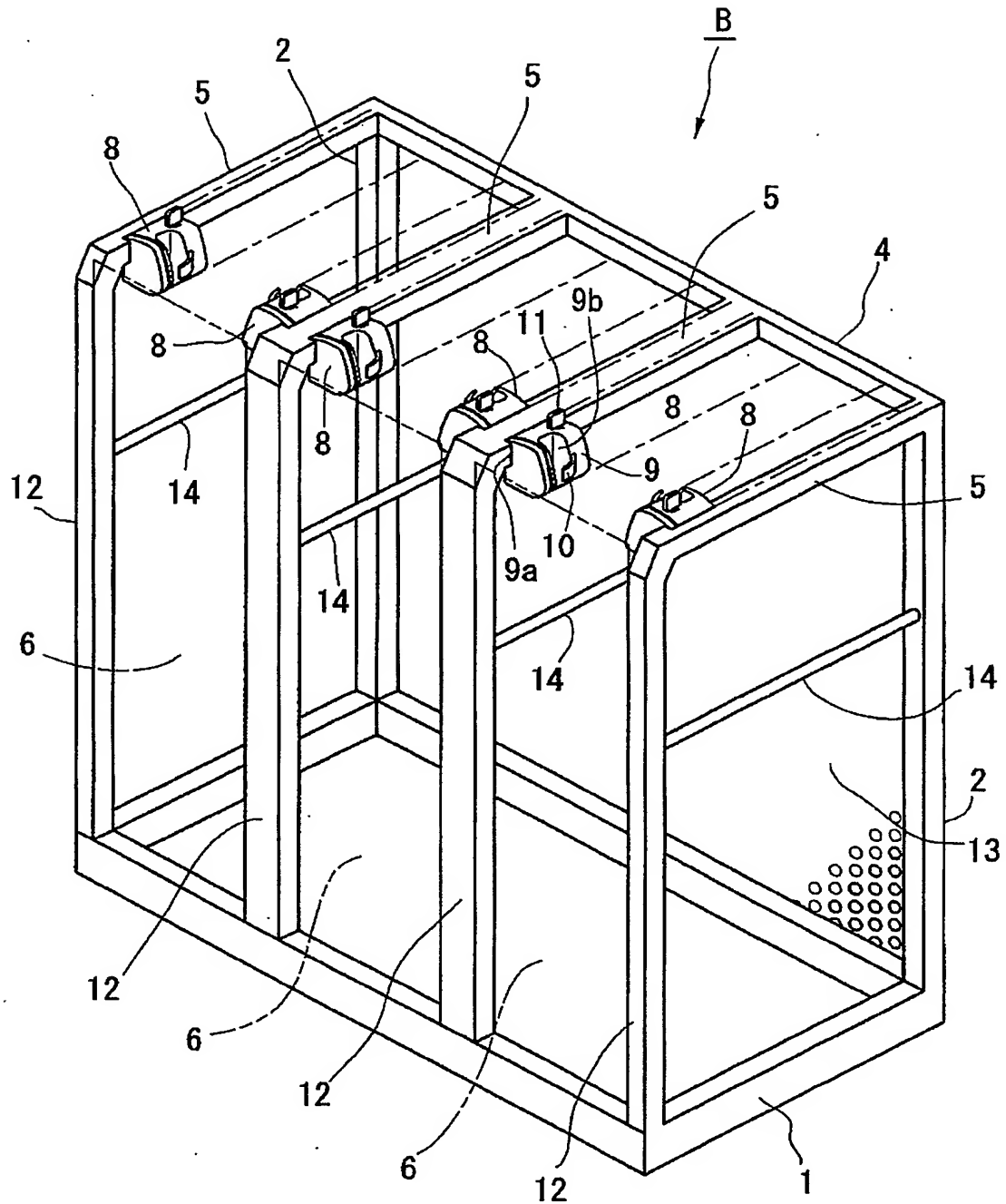
【図 4】



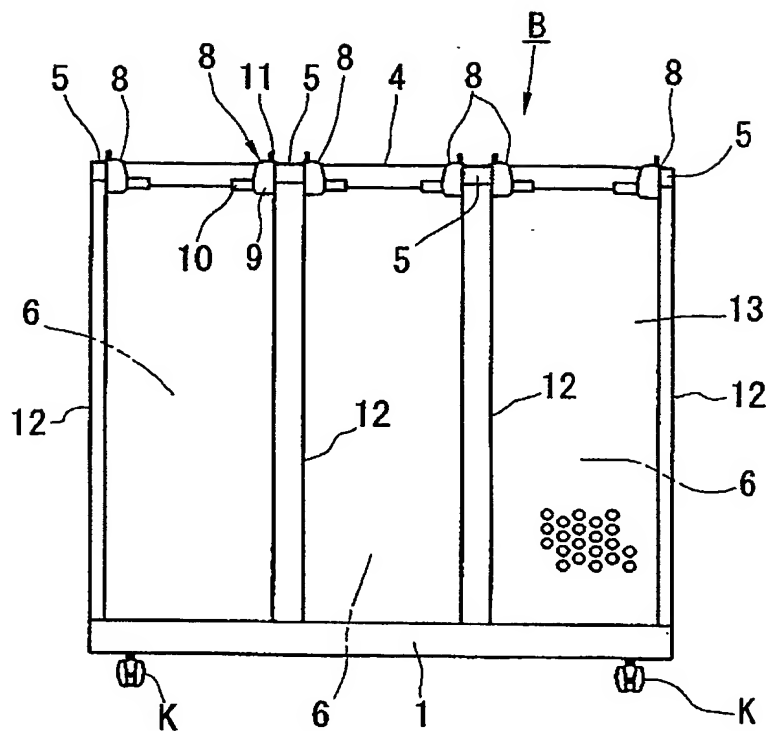
【図 5】



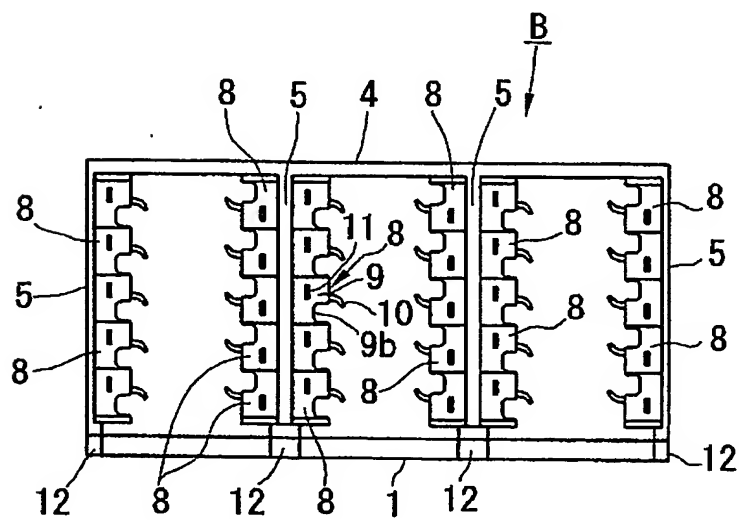
【図 6】



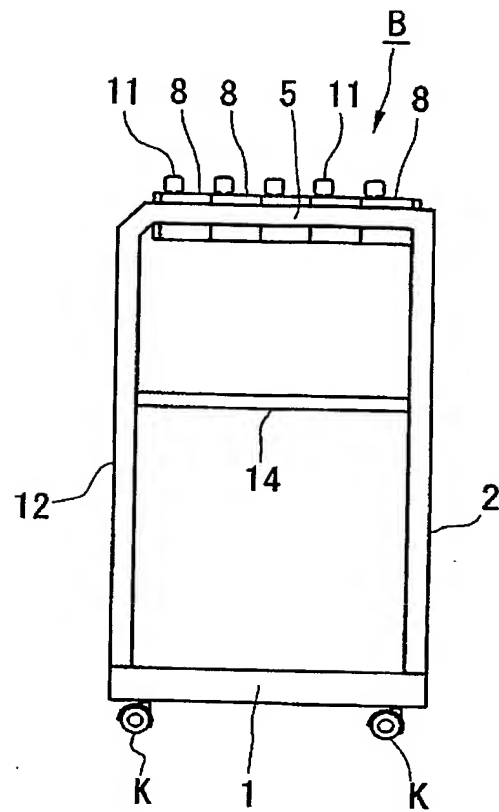
【図 7】



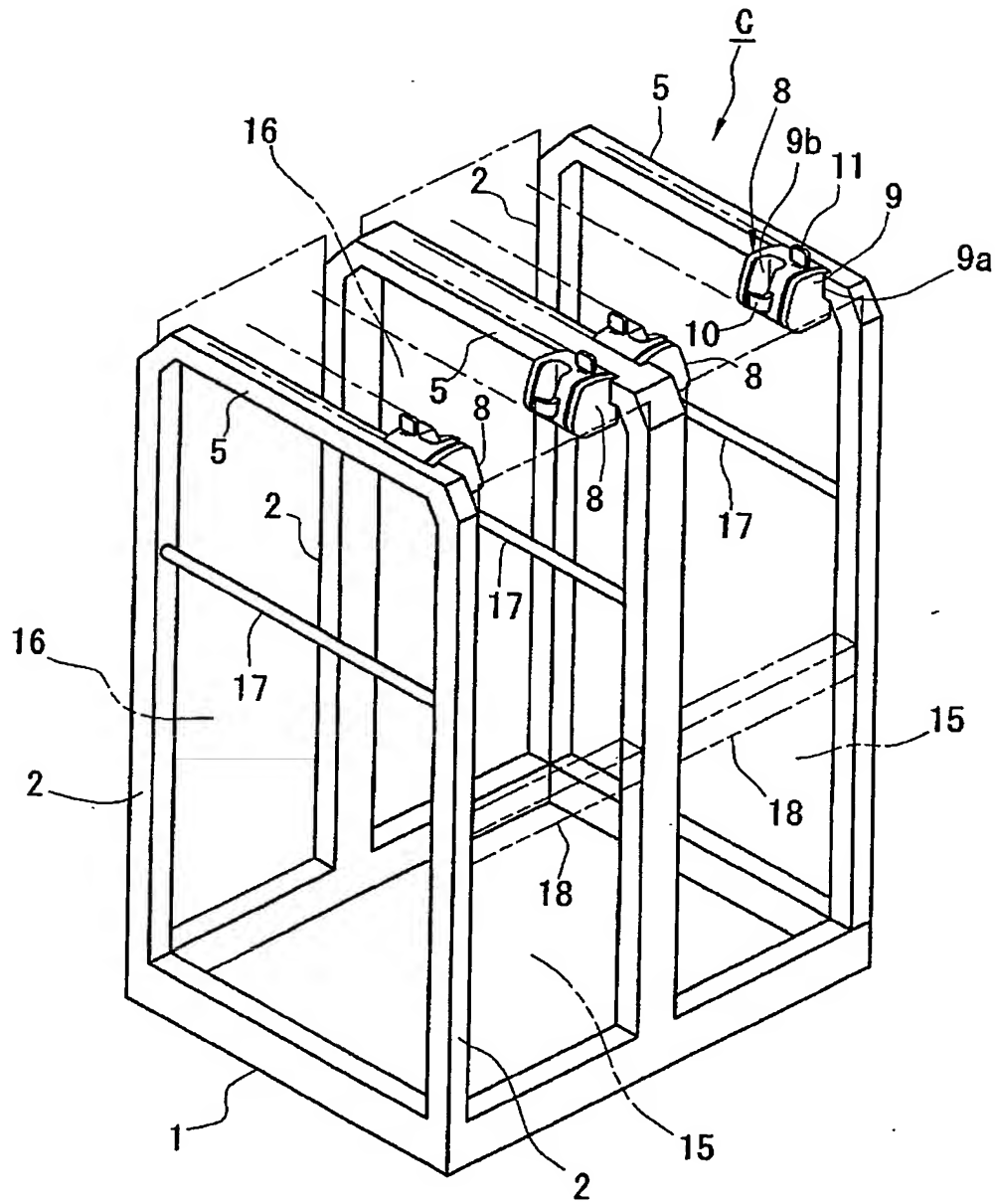
【図 8】



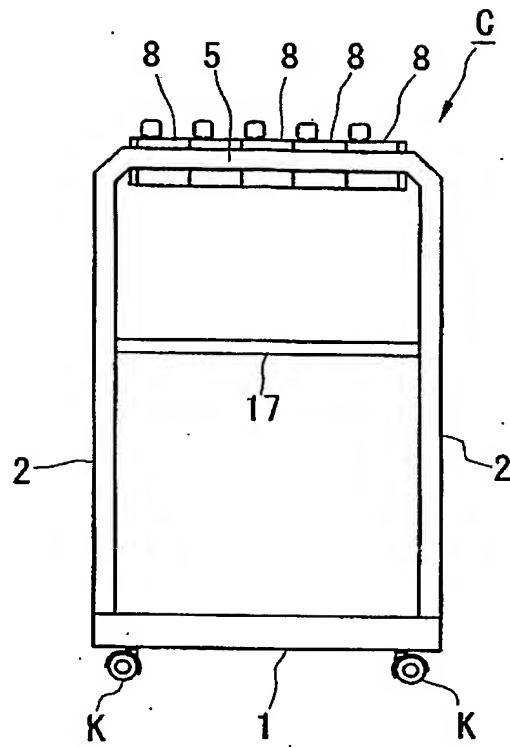
【図 9】



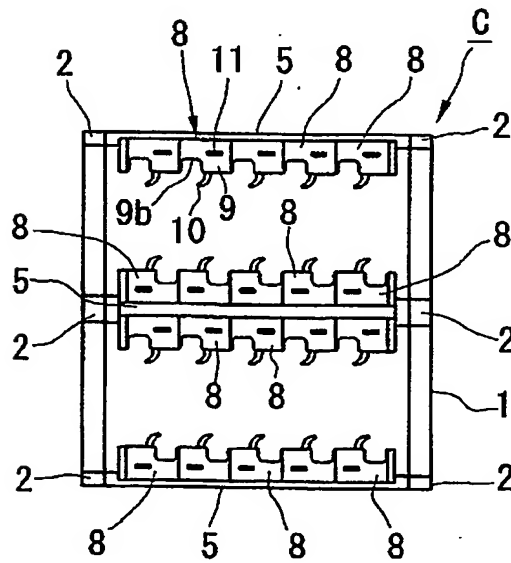
【図 10】



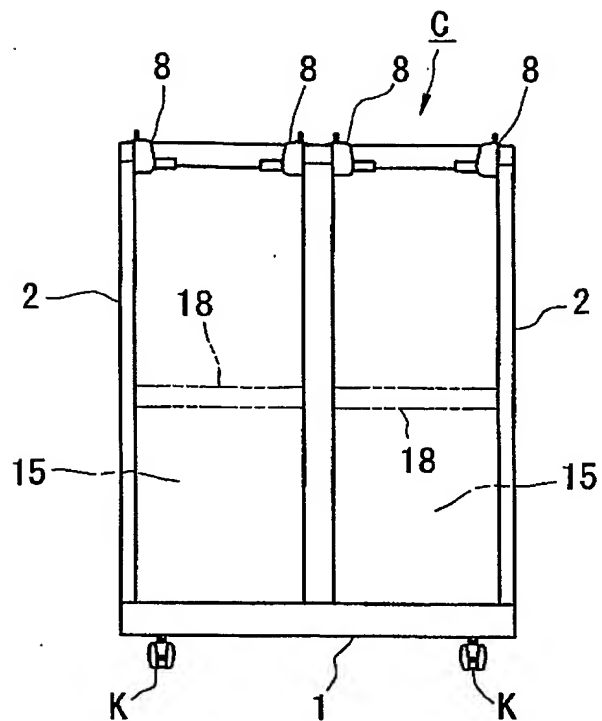
【図 11】



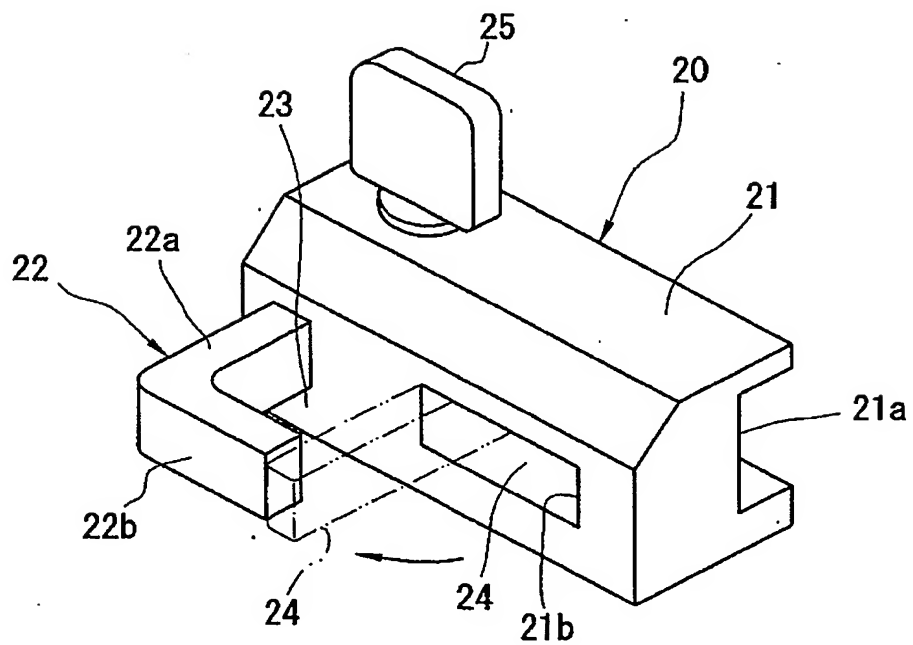
【図 12】



【図 13】



【図 14】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 傘を保管装置に保管する際に、傘の石突きから滴り落ちる水滴によって先に保管された傘の把手が濡れるのを防止する。

【解決手段】 水受け部 1 の奥側の左右両端部に支柱 2, 2 を立設する。支柱 2, 2 の上端部間には、長手方向を左右方向に向けて水平に配置された保持部材 4 の両端部を固定する。この保持部材 4 の両端部及び保持部材 4 の長さを 3 等分する箇所には、長手方向を前後方向に向けて水平に配置された支持部材 5 の基端部をそれぞれ固定する。左右に隣接する支持部材 5, 5 の先端部と水受け部 1 の前端部とによって区画される前端面部 6 を開放する。これにより、前端面部 6 から傘を支持部材 5, 5 間に挿入することができるようにする。各支持部材 5 には、傘の把手又はその近傍の中軸を保持する保持錠 8 を設ける。

【選択図】 図 1

認定・付加情報

特許出願の番号	特願 2002-183010
受付番号	50200918175
書類名	特許願
担当官	第四担当上席 0093
作成日	平成14年 6月25日

<認定情報・付加情報>

【提出日】	平成14年 6月24日
-------	-------------

次頁無

特願 2002-183010

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号

[000107572]

1. 変更年月日

1990年 8月29日

[変更理由]

新規登録

住 所

東京都千代田区東神田1丁目8番11号

氏 名

スガツネ工業株式会社

2. 変更年月日

2001年 8月23日

[変更理由]

住所変更

住 所

東京都千代田区東神田1丁目8番11号

氏 名

スガツネ工業株式会社